

## 28P1-am205

アトピー性皮膚炎治療薬としてのステロイドおよびタクロリムスが酵母*Malassezia*に与える影響

○杉田 隆<sup>1</sup>, 原田 聡<sup>1</sup>, 西川 朱實<sup>1</sup>(<sup>1</sup>明治薬大)

【はじめに】アトピー性皮膚炎(AD)は強い掻痒感を伴う皮膚疾患であり一般的に治療困難である。われわれは、皮膚常在微生物 *Malassezia* が AD の増悪因子であるあることを明らかにし、これを除菌することで AD の症状が改善することを臨床的に示した。この度は、AD の標準的治療薬であるステロイドとカルシニューリン阻害薬タクロリムスが *Malassezia* の分泌性リパーゼ産生およびアレルゲン遺伝子の発現に与える影響について検討した。【材料および方法】ステロイドおよびタクロリムス存在下で *Malassezia* を培養し、アレルゲン遺伝子発現およびリパーゼ活性を測定した。【結果および考察】タクロリムスは濃度依存的にアレルゲン遺伝子発現を抑制させたが、ステロイドはその発現に影響を与えなかった。リパーゼ活性については、ステロイドは濃度依存的に活性を低下させたが、タクロリムスは逆に上昇させた。しかしタクロリムスは臨床濃度以下で抗真菌効果を有するため、この作用は临床上は問題ないと考えられる。以上、ステロイドおよびタクロリムスは AD の増悪微生物 *Malassezia* に対して治療上有意な作用を示すことが明らかになった。

【会員外共同研究者】坪井良治・田嶋美磨・津福久恵(東京医大・皮膚科)